

令和元年度スーパーグローバル大学創成支援事業プログラム委員会（第1回）議事概要

1. 日 時：令和元年12月2日（月）15：30～17：30

2. 場 所：弘済会館「萩」

3. 出席者：

（委員）明石 委員、岡島 委員、小川 委員、帯野 委員、梶山 委員、木村 委員、
佐藤 委員、日比谷 委員、マルクス 委員

（文部科学省）森 大臣官房審議官、林 高等教育局高等教育企画課国際戦略分析官、
佐藤 同国際企画室長、吉岡 同専門官 ほか

（事務局）家 独立行政法人日本学術振興会理事、石田 同人材育成事業部長、
成田 同大学連携課長 ほか

4. 概要

（1）令和元年度フォローアップ結果について

○平成26年度に採択された37大学の平成30年度実績等について、「資料1 令和元年度フォローアップ結果」に基づき事務局から説明があった。

（2）令和2年度中間評価について

○「資料2-1 令和2年度中間評価と最近の動き」、「資料2-2 事業期間全体のイメージ」、「資料3-1 令和2年度実施中間評価に係る基本的方針（案）」、「資料3-2 令和2年度実施中間評価に係る基本的方針案（評価項目）」、「資料4 中間評価要項（改正案）」、「資料5 中間評価スケジュール（案）」に基づき、文部科学省及び事務局から説明があった。委員からの主な意見は次のとおり。

- ・中間評価も重要だが、数値目標未達成の大学が2023年度までに目標を達成できるよう、エンカレッジすることを考えてもらいたい。
- ・大学は私立学校もあり、極めて多様であるため、SGU以外の大学に対する成果の普及は、SGUの取組を全国の大学が目指すべきモデルとするのではなく、グッドプラクティスのよき部分部分を自大学へ取り入れるための好事例として示すのがよい。
- ・SGUを実施するにあたっては、アイデンティティという観点から日本語だけではなく日本文化全体を学ぶという視点が大切であり、モデルとなる大学の取組を社会に発信していくことが重要だ。
- ・大学の国際化にナンバリングは必要と言われているが、ナンバリングは、単に学内の科目を整理するものではなく、学生が留学した際に、これまでどこまで学習が進んでおり、まだ学習できていないところはどこなのかをすぐに分かるようになる。結果、学生が留学先で同じことを二重に学習するのを極力防ぐことができる。ナンバリングは、学生の流動化

の促進に結びつけるべきである。

- それぞれの強みや特色を活かし、どのようなグローバル人材を育てるかという点がロジックモデルに不足している大学が散見される。特色ある事業として各大学が重点化する指標や取組をロジックモデルに落とし込むことが必要だ。
- 中間評価でアウトカムに焦点をあてるとともに財政支援期間終了後の大学による自走化についても評価の対象とする点は良い。一方で、ロジックモデルにおいては、アウトプットとアクティビティが論理的につながっておらず、アウトプットが目標に届いていないこともあると思われ、その場合、アクティビティに立ち戻って原因を見直していくことも必要。
- 高校生が大学生と対話することで多くの学びを得ることもあり、そのような人材育成の場を作っていくことも重要。高大連携の観点から、スーパーグローバルハイスクール(SGH)とSGUは別々に取組を進めるのではなく、相互に連携できるとよい。

(3) その他

- 「資料 6 令和 2 年度概算要求について」、「資料 7-1 高度人材ポイント制による出入国管理上の優遇制度」、「資料 7-2 海外校の定員告示改正について」、「資料 7-3 QS-APPLE における SGU の発信について」に基づき、文部科学省から説明があった。